

# 質的データの分析と私

太郎丸 博

# 私がやってきた質的データ分析

1. エホバの証人のエスノグラフィー(1991)
2. 権利能力論のQCA(1995)
3. 「人生案内」の時系列比較(1999)
4. 「ソシオロジ」と「社会学評論」に見る社会学の方法のトレンド(2009)

# 1 エホバの証人の エスノグラフィ

- 1991年 M1の頃

# エホバの証人とは?

- エホバの証人(-しょうにん)とは、1884年に [チャールズ・テイズ・ラッセル](#)により創始され、...(中略)... 信者は全世界(2008年現在235の国や地域)で活動しており、人々に聖書を学ぶよう促し永遠の命へ導くことが愛を表す最高の方法とし [宣教](#)活動に活発であることで知られる (Wikipedia より引用)。

# エホバの証人との出会い

- アパートに布教に来たので、身分と目的を説明して、インタビューさせてもらった

# 問いと仮説

- なぜ、あれほど布教活動でがんばられるのか？
- 過酷な布教活動が、集団の凝集性を高めているのでは？

# ジレンマとストレス

- 信者はみないい人
  - しかし、私に入信するよう勧誘
  - 良好な関係を保ちつつ、入信はかわし、プライバシーを聞きだすのがしんどかった
- 
- 2, 3ヶ月で中止

# レポートのための教訓1

- このような研究は、エスノグラフィー以外には難しい
- 仮に研究を継続したとしても、「集団の凝集性を高めている」と証明できたか？
  - 対照群の不在
  - cf ジェンダーとフリーター



# 2 権利能力論 のQCA

- D1, D2のころ

# 権利能力とは？

- 権利を持つ能力、資格のこと。所有権など私法上の権利に関して問題になる。女性や奴隷などは権利能力を持ってない時代があった。
- エールリッヒ『権利能力論』をもとに、権利能力を持つための条件について研究

# QCAとは?

- 質的比較分析 Qualitative Comparative Analysis のこと。C. C. Ragin が比較分析の方法として考案。少数事例の比較分析の方法。

# QCAの基本

例1 連言

A	B	Y	n
0	0	0	2
0	1	0	1
1	0	0	3
1	1	1	4

$$Y = AB$$

例2 選言

A	B	Y	n
0	0	0	1
0	1	1	4
1	0	1	5
1	1	1	9

$$Y = A + B$$

- A: 世俗内的宗教 (1: Yes, 0: No)
- B: 禁欲的宗教 (1: Yes, 0: No)
- Y: 資本主義の勃興 (1: Yes, 0: No)
- n: 対応する国の数

# エールリッヒ/私の主張

- $R = A + BD$
- $R = D$
- R: 権利能力, A: 社会の個人主義化, B: 性別,  
D: 世帯の独立

# 研究の限界

- 法制史、歴史の専門家になる必要
- RとDの経験的識別の困難
- 矛盾する条件組み合わせの処理

# レポートのための教訓 2

- 歴史資料のほとんどは質的データ。
- QCAで歴史的な事例の分析をするというアイデアは悪くないが、突き詰めると歴史の専門家にならざるをえない(一次資料へのアクセス)
- 微妙な事例の解釈を恣意性を排除して行う方法論の必要性

# 3「人生案内」の 時系列比較

- 助手から講師になったころまで



# 「人生案内」とは？

- 読売新聞の身の上相談コラム。戦前から続く長寿記事。

# 研究の発端

- 見田宗介「現代における不幸の諸類型」
  - 「欠乏と不満」「孤独と反目」「不安と焦燥」「虚脱とけん怠」の4類型
  - マルクス主義的疎外論による現代社会批判
- おもしろいが、あやしい。
- もっと厳密な研究はできないか？

# コンピュータ・コーディング

- キーワードを検索し、キーワードが含まれているテキストには 1、含まれていないテキストには 0 を割り振る。

# 身の上相談の収集

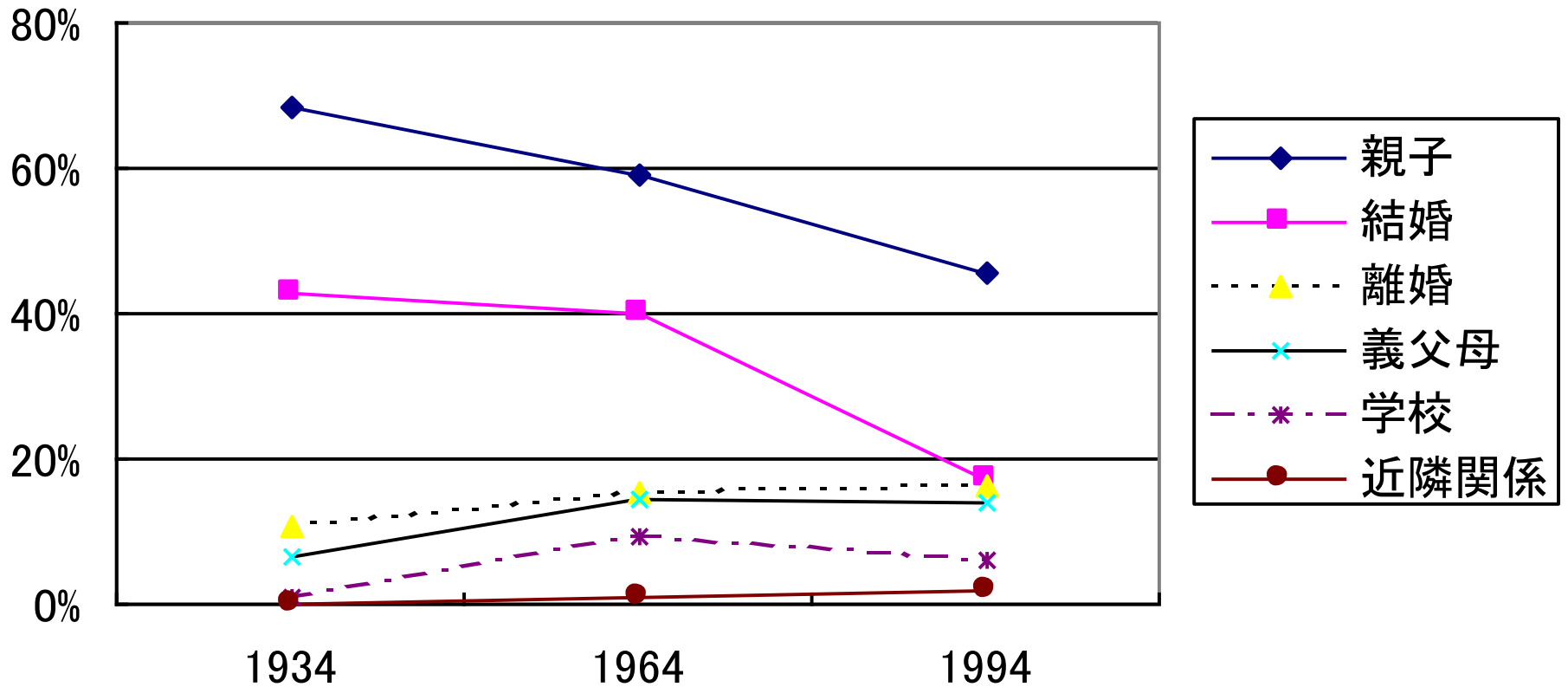
	1934年	1964年	1994年
記事の名前	悩める女性へ	人生案内	
相談者の性別	女性のみ	男女とも	
抽出間隔	1日おき	2日おき	
有効な事例の数	110	117	116

# 行き詰まり

- 見田のようにはとても分類できない
  - 「貧困」・「孤独」・「けんたい」といった分類は、よほど無理やりやらないとできない
- 記事を読むのは面白いが、どう分析したらいいかわからない
- このデータから答えの出る問題を探す羽目に

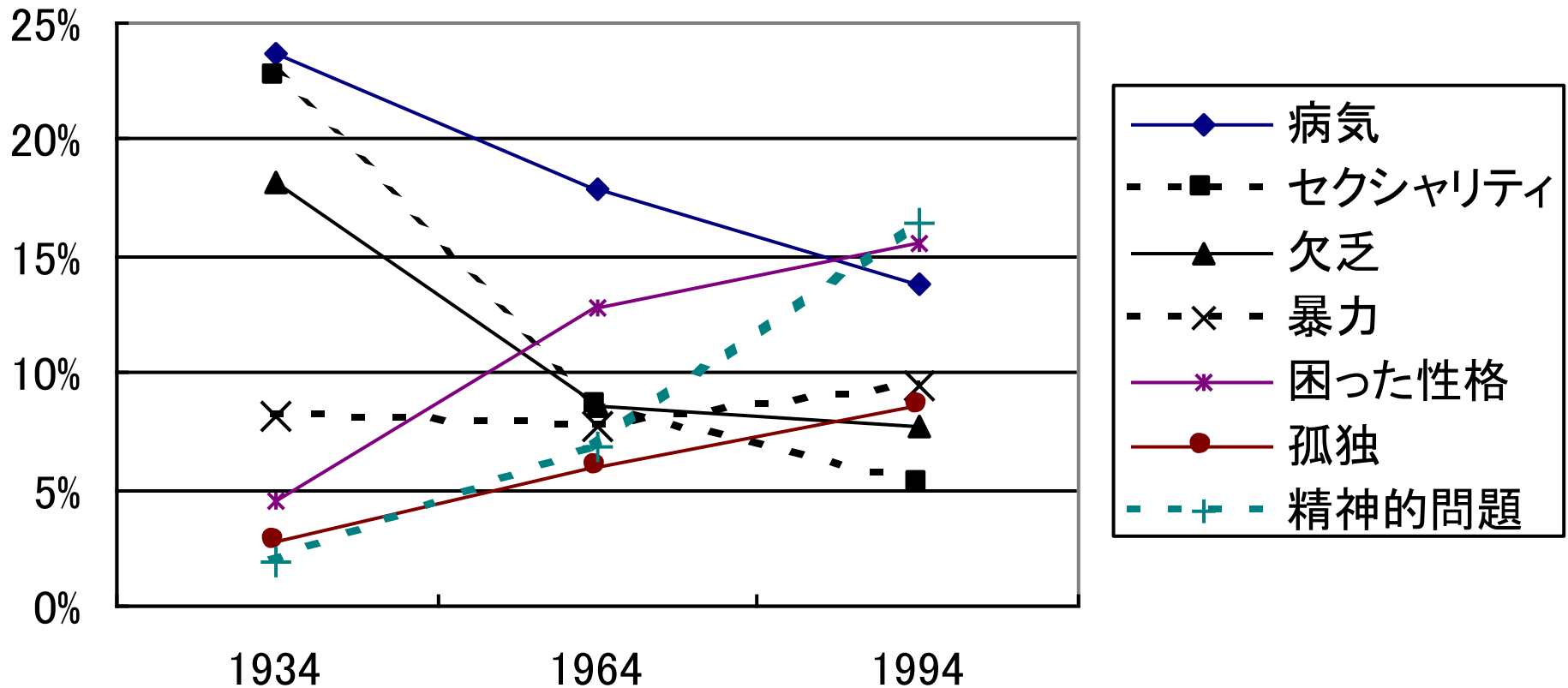
# 個人主義化への着目1

図4 人間関係への言及



# 個人主義化への着目2

図5 悩みに関わる要因の比率とその変化



# 反省

- 2, 3年取り組んだが、不本意な論文を1つ書いただけ。
- 準備が不十分なままデータの収集・分析を始めたのが失敗の原因
- 先行研究の探索や問題の定式化かが不十分だった



# レポートのための教訓

- 事例や対象のおもしろさだけでなく、それらを通して何を研究するのか考える必要性。
- 既存の研究の蓄積との連続性が必要では？

# 4 日本の社会学の 方法のトレンド

- 現在進行中

# 発端

- 関西社会学会のシンポ「演繹的社会学の『復権』」
- 日本の社会学の歴史については質的な記述はあるが、統計的なアプローチはほとんどない
- どのような方法が用いられてきたのか、その推移を知りたい

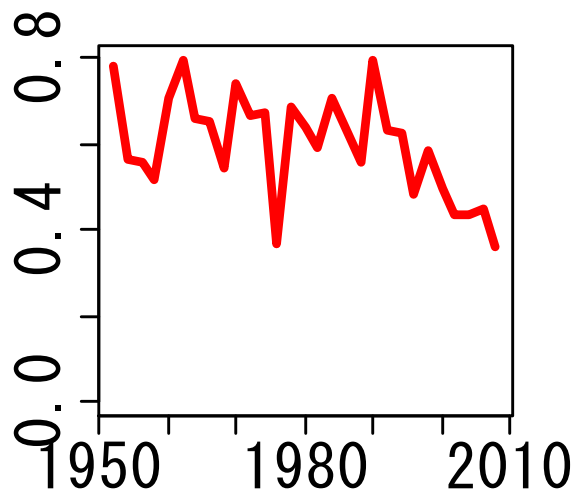
# 被害妄想と“Methodocentrism”

- ほとんどすべての社会学者は、自分は少数派で迫害されていると思い込んでいる
- そのため、人によって支配的な学派や方法論についての認識がまちまち

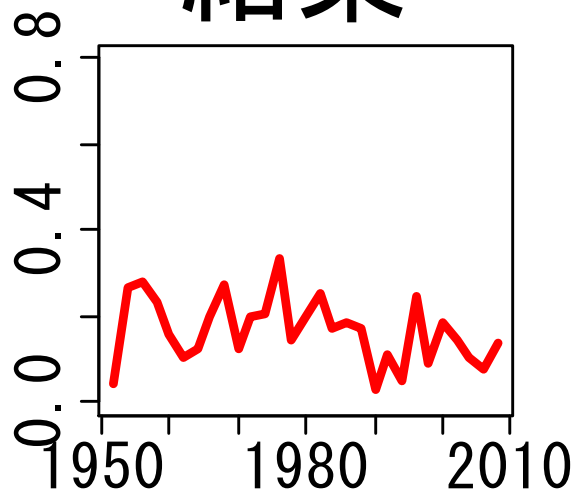
# データ

- 『社会学評論』と『ソシオロジ』の偶数年の論文・研究ノートをサンプリング

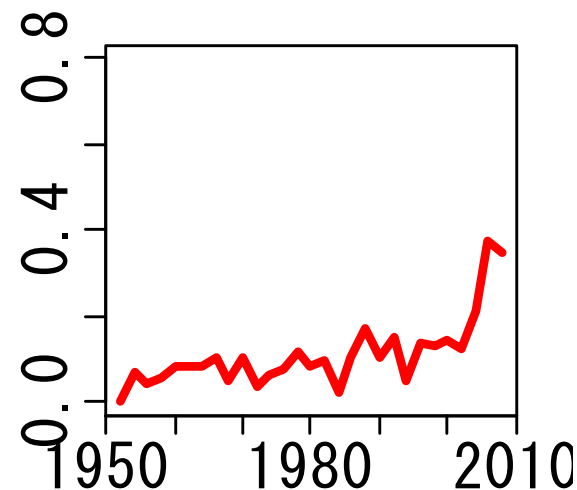
# 結果



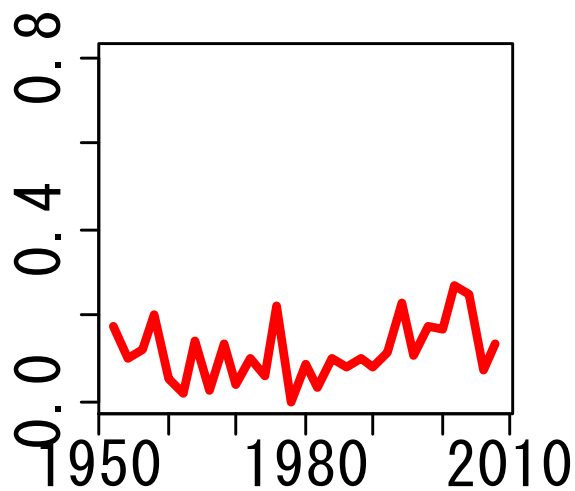
理論・学説



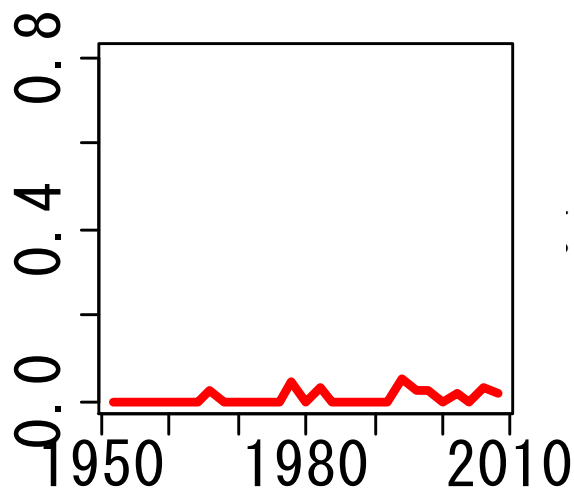
計量分析



エスノグラフィー



歴史・言説分析



数理

# 考察

- 1980～90年代を境にトレンドが変化
- 新左翼系知識人の社会学への流入？
- 遅れて来た機能主義批判とパラダイム多元化
- モダニズムなきポストモダニズムの隆盛

# レポートのための教訓

- 役には立つが、やはり「だからどうした？」感はある